

OGSS β 版

嶋田 2010/10/29

大きな変更点

- sen(形態素解析器)を使用しなくなりました
- プログラム内部に埋め込まれていたパラメータなどの情報を外部のconfファイルに移動しました

これにより、基本的には最新版のjarファイルをクリックすれば、それぞれの環境でコンパイルすることなく動作するようになります

ogss.confについて

- 起動時に自動的に読み込まれます。
認識器の数や閾値をいくらにするか、juliusの在処などの情報が記入されています。
 - 主要な部分の説明をします。詳細は後日まとめます。
 - input：マイクでテストする場合は 1 としてください。基本的には 1 でいいと思います。
音声ファイルを垂れ流して動作確認をしたいなどの需要があるときは 3 とし、
-filesp オプションでファイルのリストを指定してください。
 - anaphora：照応解析を実行する場合は 1 とします。ただ、現在の β 版は照応解析部のチューニングが十分でなく、あまりいい精度が期待できないことをご了承ください。
 - sp：julius の実行ファイルがある場所をフルパスで指定してください。
 - file：julius が読み込む conf ファイルの場所を指定してください。
 - micconf：julius のマイク設定を記入してください
- ※これ以降にあるファイル設定関連は、マイクでなくファイル読み込みによって動作確認をするためのものですので、実運用的には触らなくてOKだと思います。

実行について

- ogss.jarをダブルクリックするか、ogssフォルダ以下のソースをeclipseなどでogg.Mainを実行してください。
- 実行には新たに種々のxmlファイルが必要になっています。現在はframe.xml, voca.xml, tree.xmlの3つです。
- 出力はGUIにもいろいろと出てきますが、今回新たにoutput.xmlというのを出力するようになりました。これは共通規格に倣ったXMLを出力します。
この部分の変更が必要であれば、OutputResult.javaの中身を書き換えて頂ければと思います。

例えば、「それを取って」と発話した場合、その認識結果自体は

```
<data rank="1" score="0.0" dssr="1" text=" それ を 取って ">
```

のような形で出力されます。

ここで、rank, score, textは共通規格と同じスタイルだと思います。

dssrというのは独自の属性で、どの認識器の結果なのかの情報を表しています。

ここが0の場合はノイズ(もしくはロボットへの命令ではない)であることが極めて多いです。

-anaphoraの値が0の場合は、この結果のみ出力されます。

-anaphoraの値が1の場合は、それ以前の認識結果に基づいて先行詞(この場合は「それ」の実体)が推定されます。

例えば、

```
<kyutech:nlp_result rank="1" score="0.7" anaphoric="それ" case="bring_N" antecedent="コーラ" text=" コーラ を 取って "></kyutech:nlp_result>
```

と出たら、「それ」は「コーラ」とであると推定されたことを意味し、先行詞を補完した発話文がtextの値として出力されます。

※現在のβ版ではこの照応解析の結果が複数出力されますが、2つめ以降は未対応部分のため、現状では無視して頂ければと思います。

また、現バージョンでは、諸事情により、発話中に照応詞(「それ」など)がない場合も、何らかの結果が出力されることが多々あります。これも原版の照応解析部のミスです。次のバージョンでは修正されます。